

## 『ジャッカ・ドフニ』

2016年10月15日

私はあまり小説を読まない。だから、心が細るのではないかと思うことがある。妻はキリシタンに興味を持ち、関係する色々な本を読んでいる。津島佑子氏の遺作『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』を借りて、熱心に読んでいた。私も読んでみた。壮大な叙事小説である。舞台はマツマエ（えぞ）、フカウラ（津軽）、ヒラド（長崎）、マカオ、バタビア（インドネシア）で、登場人物が交わす言葉は、えぞ言葉、九州弁、ポルトガル語、キリシタン用語などで綴られている。物語は一人の女性の海を渡る悲劇である。

えぞの女性が砂金採りに来た日本人に犯され、女兒を産むが、男は失踪する。女兒は空を自由に飛ぶ「鳥」というえぞ言葉の「チカップ」と名付けられる。4歳の時、母親は死に、孤児になる。母親が子守歌として歌った「カムイ・ユカラ」が心の奥底に残り、この歌が彼女の生涯を支える。チカップは「チカ」と呼ばれ、軽業師の親方に売られる。エゾ言葉しか知らないチカは無言を通し、耳が聞こえず物言えない、知恵遅れとして扱われる。

17世紀の前半、キリシタンは激しい迫害を受けていた。逃亡するキリシタン一行と出会い、チカはパードレ（神父）の大きな懐に思わず飛び込み、味わったことのない安らぎを得る。チカは神父に愛され、一行に加わる。津軽で、兄とも慕うジュリアンに出会う。彼はキリシタンの息子であった。迫害に苦しむ人々の信仰を守るパードレになってほしいという両親の願いを受けてマカオに行くため、チカを伴いヒラドに逃れた。そこから数人のキリシタンたちと共に荒海を渡って新天地マカオに辿り着く。ジュリアンはパードレの指導を受け、厳しい訓練の中で、パードレの道を純粋に突き進む。チカは洗濯女として働く。マカオには、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって奴隷とされた朝鮮人ペテロや、混血児、奴隷など様々な民族のキリシタンたちが肩を寄せ合って暮らしていた。信仰は自由に認められ、天主堂での礼拝を喜ぶが、窮乏生活だった。そのマカオからも追放令が出て、チカは友人に誘われ、バタビアに海を渡って逃れて行く。兄とも恋人とも慕っていたジュリアンには何も告げず、悲しみながら去った。

バタビアで結婚し、3人の子どもを得る。チカの故郷、えぞへの憧れは抑え難く、長女、次女を、夫に秘して、えぞ地に送り出す。夫からの暴力に耐えかね、離婚する。そして、再婚し、更に子どもを得る。バタビアから、生きているのか、パライス（天国）に行ったか分からない、また、届くかどうか分からない手紙をジュリアン宛てに、代筆してもらい3通、認める。最後の手紙は、死の床で朦朧とし、代筆者の解説を交え、口述する。

悲しく、辛い人生を強く、ひたむきに生きながら、報われることなく、海を渡り続けても、鳥になってえぞに帰ることなく終わった。チカを支えたのは信仰ではなく、母親から聞かされた「カムイ・ユカラ」であった。苦しい時、嬉しい時、口から出るきれいな歌は自分自身を慰めるだけでなく、聞く人たちの心を喜ばせた。

えぞ人は日本人から差別、虐待され、苦難を負った。キリシタンは迫害を受け、無残な死を強いられた。チカは二重の苦難を負い、えぞから海上を流されバタビアに辿りついて、そこで死んだ。津島氏は、民族が交錯する中で、命の限りを生きたチカに焦点を当て、愛おしんだのではないか。「ジャッカ・ドフニ」はサハリンの少数民族ウィルタ人のゲンダーヌ氏が20世紀末に、アバシリに建てた北方民族博物館で、「大切なものを治める家」という意味である。大切なものが粗雑に扱われている現在、17世紀と現代を交錯させながら、貧しい少数者に心を向ける津島氏の柔らかな感性に感銘を受けた。